國學院大學学術情報リポジトリ

Potential Expressions without Negation in the Kokin Wakashu

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: Nakamura, Yukihiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000587

該当する単語が特定できないのに、可能の意が読みとれる表現について

―否定表現を共起させない、『古今和歌集』歌の可能表現に限って―

中村幸弘

はじめに――標題のテーマを意識した日

昭和三十年代の中ごろから刊行が続いていた明治書院の講座もの『講座　解釈と文法』の存在を知ってはいたが、精読の機会を得たのは、昭和四十年に入ってからであった。引用された用例なども含めて、その論旨が明確に記憶された一編は、その2の「[記紀歌謡・万葉集・古今集・新古今集]」に収録された佐伯梅友「古今集の解釈と文法上の問題点」[1]で、殊に、その四の「結果的表現」が印象強く受けとめられた。「結果的表現」という、その命名について、「適当ではないかもしれないが、」として、「言葉のうえには可能の意をあらわすものがないのに可能の意を入れて意味をとるとわかりやすいものについて、」考えようとする論考であった。ただ、その多くは、打消表現と重なる用例で、そうでもない用例は、「住めば住みぬる」（九四五）が「住むことができて、その結果こうして住んでいること」になる用例と、「ありぬやと心みがてらあひみれば」（一〇二五）が「ありえて、その結果「ありぬ」ということになる」用例との、二用例が引かれていただ

けであった。そうなる理由はともかく、「住みぬる」が〈住むことができた〉意となること、「ありぬや」が〈あわないでいることができるか〉の意となることは、何とも不思議であった。

ただ、その「住めば住みぬる」については、同じ解説を知っていたのである。それは、日本古典文学大系『古今和歌集』の解説六の9[2]として読んでいたからである。そこには、「心あてに」歌（二七七）の「折らむ」についても、「散りぬれば」歌（六四）の「折らば」についても、可能の意が読みとれるとしていたのである。

その後、日本古典文学全集『古今和歌集[3]』の「いまいく日（か）ありて若菜つみてむ」（一八）の「てむ」に限定しての頭注ではあるが、「…するに堪えよう」（可能性の推量）という解説を見て、その訳〈若菜が摘めるのかしら〉がいっそうよく理解できた。

さらに、二十年余が過ぎて、新編日本古典文学全集『古今和歌集[4]』の「心あてに折らばや折らむ」（二七七）の頭注で、片桐洋一が、その「む」を可能を含んだ推量と解していることを知った[5]。片桐説は、論考などがあるのか、施注などの記事に見るのであろうか。そして、この用例については、夙にあの三矢重松『高等日本文法』が、その「折る」を生得被能動詞として注目していた[6]のである。

助動詞「む」や連語助動詞「てむ」、また助動詞「ぬ」などに、その意味として可能を挙げている文法書がないかと心掛けているが、これにも出会えていない。もちろん、該当する単語なり連語なりを特定することなく、そこに可能の意の読みとれる表現について取り立てているものも、あの佐伯論考以外、見当たらない。

ようやくにして、この問題に関わる記事を見たのは、『日本語文法大辞典』で、認識の遅れを補おうとしていてであった。「可能」（小松光三担当執筆）が立項されていて[7]、「蓋然性ではなく可能性を表すことのできる推量の助動詞もある」とし、「蓋然性の度合いによって、区別する推量の助動詞が存在した」ともして、「べし（否定は「まじ」）と「む（否定は「じ」）とを区別していた。一般に「べし」には可能の意を認め、「べからず」の用例が引かれるが、「む」に可能の意を認める文法書は見られない。そういう取り扱いと結びつけるなどして解するのがよい記事だったが、そういうところにまで踏み込んでくれてはいなかった。

この間に、目的は別の視点からではあるが、数度、『古今和歌集』歌を通読していて、これもそうかと思える可能の表現に出会っている。ただ、改めていうまでもなく、打消表現のなか

の可能表現が圧倒的に多い。打消の助動詞「ず」を用いた「花よりさきと知らぬわが身を」（二七六）などだけではく、「とどむべきものとはなしに」（一三二）「枕さだめむ方もなし」（五一六）なども見るところから、それらを一括して否定表現として受けとめ、そのような不可能表現のなかの可能表現については、調査の対象から外して、標題のように肯定表現に限定して認識したいと、かねがね思っていた。新編日本古典文学全集『古今和歌集』歌の訳を参考に該当用例を検出し、適宜、類別して報告したいと、かながね思っていた。

ところが、さきごろ、佐伯梅友いう「結果的表現」を起点とした吉井健「「結果的表現」から見た上代・中世の可能」というご卓論を拝見、少なからず慌てた瞬間があった。五十年以上、佐伯論考を直接的に受けての論考を見ることがなく、今後もないであろうと、独り思い込んで、作業を終えたノートを放置してあったからである。起点を同じくして、上代・中古の可能表現を大きく総括する吉井論文が存在する現在であっても、一瞬躊躇してから、昭和四十年某日に抱いた素朴な実態整理の報告なら許されようかと思って、半ば完了しているノートに章立てを試みた。小稿のテーマを改めて意識した日である。

一　助動詞「む」「らむ」や連語助動詞「てむ」に連なる動詞に可能の意が読みとれる用例

推量の意のほかに、意志、また、勧誘などの意を担う助動詞「む」、現在推量や原因推量などの意を担う助動詞、また確述の助動詞「つ」の未然形「て」に推量の助動詞「む」が付いた連語助動詞に可能の意が併せて読みとれる用例が存在して注目される。A群としておくこととする。

(1) 人目もる我かはあやな花すすきなどか穂にいでて恋ひずもあらむ（五四九）

人目を憚る必要ある私が、そうではないとして、複雑な心理を詠んだ詠人知らず歌である。「などか」は反語副詞で、推量の「む」が呼応している。この「あら（→あり）」は、被補助語「恋ひずしも」を補助する補助動詞で、〈（薄の穂のような公然たる恋をしないで）いることができようか、できない〉意と読みとれる。反語表現・推量表現を背景に発生してくる可能表現である。

(2) いつはりと思ふものから今さらに誰がまことをか我は頼まむ（七一三）

人間不信を基底にした恋歌で、『伊勢物語』（三六）にも載る詠人知らず歌である。不定語句「誰がまことをか」の「か」は、疑問にも反語にも解せる。〈（誰のいう真実を）頼りにすることができるであろうか〉と読みとれる。疑問（反語）表現・推量表現を背景に発生してきた可能表現である。

(3)かけりても何をか魂のきても見む骸は炎となりにしものを

（一一〇二）

死者の魂があの世から帰るという信仰に対して、皮肉を言っている藤原勝臣歌である。仏教思想に基づいた火葬の慣習で、その人の亡骸は既に炎となってしまった。魂が宿るところがなく、「何をか」の「か」も疑問にも反語にも解せる。〈（魂が天翔って帰ってきても、何を）見ることができるだろうか〉と読みとれる。疑問（反語）表現・推量表現を背景に発生してきた可能表現である。

(4)春日野の飛火の野守いでて見よいまいく日ありて若菜摘みてむ（一八）

飛ぶ火、つまり、烽火を管理する野守とも、野焼きする農民を野守と見立てたともされる詠人知らず歌である。「いまいく日ありて」という不定語句を受けているので、〈（あと幾日したら、若菜を）摘むことができるだろうか〉と読みとれる。その「ありて」が「あらば」と解せたところから、次のB群とも通うことになる。疑問表現・推量表現を背景に発生してくる可能表現である。

(5)白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちぢに染むらむ

（二五七）

是貞親王家での歌合わせで詠まれた藤原敏行歌である。白露と紅葉とが織りなす美を、「ひとつ」と「ちぢ」との漢詩の数対で捉えていて機知的である。「いかにして」は方法についての不定語句で、〈（秋の木の葉を千差万別に）染めなすことができているのだろうか〉と読みとれる。「らむ」で、現在できていることの原因を推量していることになるか。疑問表現・推量表現を背景に発生してくる可能表現である。

二　仮定条件句の帰結句に用いられる「む」「てむ」「なむ」などに連なる動詞が可能の意に読みとれる用例

活用語の未然形が接続助詞「ば」を伴ったり、打消の助動詞「ず」の未然形が接続助詞「は」を伴ったりした順接仮定条件を表す条件句があって、その帰結句として文末に位置する推量

の助動詞「む」、また、確述の助動詞「つ」「ぬ」の未然形と「む」が連語化した「てむ」などに連なる動詞に可能の意が読みとれる用例が存在して注目される。B群としておくこととする。

(6)心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花

（二七七）

初霜が人を当惑させる状況をユーモラスな思いつきで受けとめた凡河内躬恒歌である。当て推量に〈折るなら、折ることができるであろうか〉と読みとれる。「折らばや」は、順接仮定条件句に疑問の係助詞「や」が付いていて、仮定条件句を受けた疑問表現・推量表現を背景に発生してきた可能表現である。

早くに佐伯の指摘があり、片桐説としても小沢に紹介された用例である。ただ、その小沢は、〈（当て推量で）折る以外にないだろうよ〉と訳出している。佐伯も、〈（折るなら）折られようか〉と解する説を結果的表現に相当しようとしながらも、〈（折るなら）折ろうか〉と訳していた。

(7)片糸をこなたかなたに縒りかけてあはずはなにを玉の緒にせむ（四八三）

糸を比喩に恋の思いを縁語も取り入れて詠んだ詠人知らず歌である。片糸を双方から縒り合わせなければ糸はできないが、それが縒り合わないように、〈逢わないなら、（何を命の綱として）生きていくことができるであろうか〉と読みとれる。サ変動詞「せ（→す）」に〈生きていく〉意が託されており、「なにを」という不定語句が「む」と呼応して疑問表現を構成している。また、この仮定条件句の動詞にも可能の意が読みとれるところから、追って取り上げるD群とも重なることになる。それはそれとして、本用例も、仮定条件句を受けた帰結句の疑問表現・推量表現を背景に発生してきた可能表現である。

(8)浅みこそ袖はひつらめ涙川身さへ流るると聞かばたのまむ

（六一八）

業平邸にいた女性に敏行が贈った歌に、業平がその女性に代わって詠んだ返歌である。「涙川身さへ流る」を引用の格助詞「と」で受けた「聞かば」までを順接仮定条件としていることになって、その帰結句が「たのまむ」である。上二句はそこで切れる二句切れで、浅いから袖が浸ったのだろう、と言い切って、改めて仮定条件句を受けた後、「たのまむ」の「む」という推量表現から、可能と逆接の意が発生してきていて、〈涙川で体まで流れると聞いたら、信用することもできるだろう〉と読みとれるのである。ここにも、仮定条件句を受けた帰結句の帰結句末尾の推量表現から発生した可能表現が見られたのである。

(9)梓弓おしてはるさめ今日降りぬ明日さへ降らば若菜摘みてむ

（二〇）

枕詞「梓弓」で「おして」を引き出し、その「梓弓おして」を序詞にして「はるさめ」を引き出していて、三句切れで切れる詠人知らず歌である。春が目前に迫っていることを詠んでいて、順接仮定条件句「…降らば」を受けた帰結句「摘みてむ」の「てむ」について、小沢・松田は、「一八の歌と同意とみるが、「さあ…しよう」（決意）とも解せる。」といっている。そこで、多くが、その春雨が〈明日まで降ったとしたら、きっと（若菜を）摘みとることができるだろう〉と読みとれる。本用例も、仮定条件句を受けた帰結句に用いられた推量表現を背景にして発生した可能表現である。

⑽かたちこそ深山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ

（八七五）

容貌の異様なのを女性たちに笑われて、いっそう笑わせようとしている兼芸法師歌である。上の句三句で切れる三句切れだが、自らを深山隠れの朽木だが、という逆接展開が見えてくる。その仮定条件句「花になさば」そのものにも可能の意が感じとれ、〈花にすることができるなら、きっと花となることができるだろう〉と読みとれる。D群と重なるB群である。本用例もまた、仮定条件句を受けた帰結句に用いられた推量表現を背景にして発生した可能表現である。

三　反実仮想表現形式としての「…せば…まし」「…ずは…まし」などの帰結句に用いられる助動詞「まし」に連なる動詞に可能の意が読みとれる用例

反実仮想表現形式の仮定条件句部は多様であるが、和歌にあっては、過去の助動詞「き」の未然形「せ」に接続助詞「ば」を伴った「せば」が多く、「…せば…まし」が定着している。その仮定条件が動詞を打ち消して発想されたとき、その反実仮想表現は、「…ずは…まし」となる。その「ず」は仮定条件句を構成するところから未然形と判断され、その「は」も仮定条件句を構成するところから接続助詞と判断される。C群としておくこととする。

⑾吹く風と谷の水としなかりせばみ山がくれの花と見ましや

（一一八）

「寛平御時后の宮の歌合の歌」という詞書ある紀貫之歌である。二十歳代のころの作ということになろうか。順接仮定条件句「…なかりせば」を受けて、帰結句「…花と見ましや」の「ましや」は、推量の助動詞「まし」の終止形の下に反語の終助詞

「や」が付いていて、〈（花と）見ることができるだろうか（いや、できない）〉と読みとれる。したがって、反実仮想表現の帰結句「ましや」の反語表現・推量表現を背景に発生している可能表現である。

ここで、反実仮想表現の前提句とでもいったらいい仮定条件句「…なかりせば」が多いことに気づかされる。これらは、概念としての否定表現で、否定の仮定条件句といってよいであろう。業平の「…絶えて桜のなかりせば」（六三）も、その一用例である。帰結句「のどけからまし」は、〈長閑（のど）かでいることができるだろうのに〉と読みとれるが、「のどけから（↓のどけし）」が形容詞であるところから、小稿の対象となっていない。

⑿もみぢ葉の流れざりせば龍田河水の秋をば誰か知らまし（三〇二）

川の水には季節を知らせるものがないから、そこを流れる紅葉によって初めて知った、という坂上是則（これのり）歌である。前提条件句「…流れざりせば」は「流れずは」と同意と見てよく、反実が現実を打ち消した否定の仮定条件句である。その条件句を受ける帰結句に含まれる「誰か」の「か」が反語の係助詞であるところから、〈紅葉が流れなかったら、（川水の秋を）誰が知ることができたであろうか（誰も知ることはできなかったろう）〉と読みとれる。この用例、反実仮想表現の帰結句「誰か知らまし」の反語表現・推量表現を背景に発生した可能表現である。

⒀梅の香の降りおける雪にまがひせば誰かことごとわきて折らまし（三三六）

「雪のうちの梅の花をよめる」という詞書ある貫之歌である。反実仮想表現の前提仮定条件句「…雪にまがひせば」を受ける帰結句「誰かことごとわきて折らまし」の「誰か」の「か」は、疑問とも反語とも決めがたいようである。いずれに読みとってもよいようで、いま、疑問と見るなら、〈梅の花の香りが、そこに降り積もっている雪の匂いと紛れたとしたら、誰が梅の花と雪とを区別して、これを手折ることができるだろうか〉と読みとれることになろう。反実仮想表現の帰結句「誰かことごとわきて折らまし」の疑問（反語）表現・推量表現を背景に発生した可能表現である。

⒁老いぬとてなどかわが身をせめぎけむ老いずは今日（けふ）にあはましものか（九〇三）

宇多帝の御代、清涼殿の殿上の間で管絃の御遊が催されたときの、藤原敏行の詠進歌である。上の句は、この年齢になるまで詠進の栄誉などに与れなかったのであろうか、嘆老と不遇の

呟きである。下の句が反実仮想文で、その前提仮定条件句「老いずは」を受けた帰結句「今日にあはましものか」の「ものか」は反語の終助詞で、〈年取って生き長らえることがなかったら、栄えある今日という日に出会うことができたであろうか（できなかったであろう）〉と読みとれる。反実仮想表現の帰結句「今日にあはましものか」の反語表現・推量表現を背景に発生した可能表現である。

⑮今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや（六三）

桜花にかこつけた訪問を喜んで贈ってきた六二番歌を受けての在原業平の返歌で、贈答歌として配列されている。逆接仮定条件を表す「消えずはありとも」を反実仮想表現の前提仮定条件句としていて、それに応じた帰結句「花と見ましや」の「ましや」の「や」は、疑問の終助詞と見られ、〈（その雪が）消えなかったとしても、花と見ることができるだろうか〉と読みとれる。この用例も、反実仮想表現の帰結句「花と見ましや」の疑問表現・推量表現を背景に発生した可能表現である。

四　仮定条件句を構成する接続助詞「ば」などに連なる活用語句に含まれる動詞に可能の意が読みとれる用例

既に、A群の用例⑷の「…ありて（＝…あらば）」、B群の用例⑺の「あはずは」、用例⑽の「（花に）なさば」、C群の用例⒁の「老いずは」などが、標題に該当する用例として触れてきているところである。C群の用例⒂の、逆接仮定条件の「消えずはありとも」についても、〈消えずにいることができたとしても〉というように、そこに可能の意が読みとれて、この傾向は、広く仮定条件句に読みとれる現象であるようでもある。とにかく、それほどに、該当例が見られたのである。

仮定条件句は、右に見たところからも、可能表現を誘発する状況が醸成されているもののようである。以下には、単に、動詞の未然形に「ば」が接続しているだけではない用例、単に、打消の助動詞「ず」の未然形に接続助詞「は」が接続しているだけではない用例を紹介することとする。D群としておくこととする。

⒃梅が香を袖に移してとどめてば春はすぐともかたみならまし

（四六）

梅の香りから薫物を連想して詠まれている、「寛平御時后の宮の歌合の歌」三五番の詠人知らず歌である。反実仮想表現の前提仮定条件句「梅が香を袖に移してとどめてば」の「てば」は、確述の助動詞「つ」の未然形「て」に接続助詞「ば」が接続したもので、単に動詞の未然形に、その「ば」が接続した場合と、どれほどの違いがあるのであろうか。小沢・松田は、この「てば」の「て」を取り立てて、この「て」が可能の意を含む、としている。そこで、その仮定条件句は、〈梅の香りを袖に移して、いつまでも間違いなく残すことができたら〉ぐらいに読みとれることになろう。本用例は仮定条件句としての、殊に確述表現を添えた仮定条件句としての仮定表現を背景に発生してきた可能表現である。

⑰恋しきに命をかふるものならば死にはやすくぞあるべかりける（五一七）

恋と死とを比較して、恋の苦しさを訴えた哲学的な評論ともいえる詠人知らず歌である。「恋しきに」は〈恋しいという感情に〉ということで、その条件句は、〈恋しいという感情と命とを交換することができるならば〉と読みとれる。恋しいという感情を命と交換することができたら、死ぬことなどは、いとも容易なことだ、というのである。ここも、仮定条件句としての仮定表現を背景に発生してきた可能表現である。その動詞を取り巻く周辺の表現によって誘発されたかにも見えてくる可能表現である。

この仮定条件句に見る「…に…をかふるものならば」の「ものならば」は、その「もの」に特定の実体を読みとることができまい。時枝文法の文法観によって読み解く小沢は、この「もの」を文法的機能をもつとしている。その解説について、このような「ものならば」は、仮定条件句としての仮定表現を構成するための表現である、ぐらいに受けとめてよいであろう。

五　反語表現のなかに用いられている動詞に可能の意が読みとれる用例

既に、A群の用例⑴「などか…恋ひずもあらむ」／C群の用例⑾「…なかりせば…見ましや」／⑿「…ざりせば…誰か知らまし」／⒁「…ずは…あはましものか」／⒂「…ずはありとも…見ましや」などにおいて、反語表現のなかに用いられている動詞に可能の意が読みとれる用例について確認してきている。

それにしても、『古今和歌集』歌の反語表現は、意外なほど

に多様である。まず、終助詞「ものかは」「やは」の上は、動詞でよいのに、その動詞に「む」を添えさせた「…むものかは」「…むやは」が見られたことが記憶に残っている。『万葉集』歌に多く見られた、終止形ではなく已然形「め」に終助詞「やは」が接続する「…めやは」も、けっこう見られる。そして、不定語「誰かは」を受けて文末が連体形で結ばれる反語表現が見られる一方で、当代から見られることになった、動詞に終助詞「ものかは」を添えるだけの反語表現も存在したのである。E群としておくこととする。

⑱散る花をなにかうらみむ世の中にわが身とともにあらむものかは（一一二）

散る花を見て花とわが身を重ねた詠人知らず歌である。二文から成る一首で、二文とも反語文である。その第二文の「あらむものかは」は、〈（花もわが身も共に）生き長らえることができようか（できないに決まっている）〉と読みとれる。ストレートな物言いで、無常観を投げ捨てるように呟いている。「ものかは」の上の助動詞「む」は、反語表現が要求したのか、それとも、可能表現が要求したのであろうか。

⑲限りなき雲居のよそに別るとも人を心におくらさむやは（三六七）

旅にいる夫を待つ妻歌の次に配されている夫歌である。「人を心におくらす」は〈その人を自分の心から取り残して、後に遅れさせる〉ことで、〈あなたを意識の外に置く〉〈あなたのことを忘れる〉意となる。「おくらさむやは」は、逆接仮定条件句「…雲居のよそに別るとも」を受けて〈（あなたを）忘れていることができようか（できない）〉と読みとれる。「やは」の上の「む」、何が要求したのだろうか。

⑳袂よりはなれて玉を包まめやこれなむそれと移せ見むかし（四二五）

在原滋春の「うつせみ」物名歌への「返し」で、遊戯性の顕著な壬生忠岑歌である。滋春歌が、玉は袂に入れたなら消えるだろうといったのに対して、消えやすいといっても「袂よりはなれて玉を包まめや」と応じたもので、〈袂以外に玉を包むことができようか（できない）〉と読みとれる。「…めやは」は、上代の表現といってもよく、古くから反語表現は推量の共起を要求していたようである。

㉑咲く花はちぐさながらにあだなれど誰かは春をうらみはてたる（一〇一）

花の散りやすいことに人の心の移りやすいことを重ねた藤原興風歌である。咲く花はすべて散り足が早く、人の移り気もそ

うだとして、以下、〈（その花を咲かせる春を）恨みきることができたか（できなかったよ）〉と読みとれる。「うらみはてたる」の「はて（→はつ）」は〈完全に…きる〉意の複合動詞後項型補助動詞である。「誰かは」という反語を構成する不定語を受けて、結果として可能表現が醸成されているのであろうか。ただ、ここでは、推量の助動詞ではなく、助動詞「たる（→たり）」が不定語「誰かは」に応じている。

㉒天の原踏みとどろかし鳴る神も思ふなかをばさくるものかは

（七〇一）

「鳴る神」は雷神で、その雷神でも愛し合った二人を引き裂くことはできない、というのである。「さく」は一般には四段に活用するが、下二段にも活用する。「放く」「離く」などの漢字が当たる。〈（愛し合う関係を）引き離すことができるだろうか（できるはずがない）〉と読みとれる。

六　疑問表現のなかに用いられている動詞に可能の意が読みとれる用例

既に、A群の用例⑵「（誰がまことをか我は）頼まむ」／⑶「（何をか…）見む」／⑷「（いまいく日ありて若菜）摘みてむ」／⑸「（いかにして…）染むらむ」／B群の用例⑹「（折らばや）折らむ」／⑺「（あはずはなにを玉の緒に）せむ」／C群の用例⒀「（誰か…）折らまし」／⒂「（花と）見まし（や）」などにおいて、疑問表現のなかに用いられている動詞に可能の意が読みとれる用例について確認をしてきている。

そこで、であろうか、上記の疑問表現以外の、表現上の特徴を見せない疑問表現のなかに用いられている動詞に可能の意が読みとれる用例は、以下に紹介する二用例に限られた。F群としておくこととする。

㉓浦ちかく降りくる雪は白浪の末の松山越すかとぞ見る

（三二六）

有名な歌枕をめぐる伝承を活用して、波は越えられなくても雪だから越えられそうか、という興風歌である。その伝承は、東歌の「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ」（一〇九二）である。さて、第五句「越すかとぞ見る」の「と」は引用の格助詞である。そこで、「越すか」の「か」は疑問の終助詞で、〈越すことができるか〉と読みとれる。疑問表現を背景に発生した可能表現である。

㉔花のなか目に飽くやとてわけゆけば心ぞともに散りぬべらなる（四六八）

「はる」の二字を一首の最初と最後とに分けて置き、「ながめ」の三字を言いかけて、その時節を主題にして、いわゆる物名歌として詠まれた僧正聖宝（しょうほう）の歌である。「花のなか目に飽くや」は、連語助詞「とて」が引用する心内文の、これも文末にある用例である。「飽くや」の「や」は疑問の終助詞で、〈満足できているか〉と読みとれる。疑問表現を背景に醸成された可能表現である。

七　助動詞「べし」「ぬ」「ぬべらなり」などに連なる動詞に可能の意が読みとれる用例

助動詞「べし」については、古典文法書の恐らくはすべてが可能の意を認めているであろう。ただ、「る」「らる」の可能の意同様、打消の助動詞「ず」を多くが伴い、時に、「…べくもあらず」など、間接的に伴う場合があっても、とにかく、否定表現と共起する用例に限られると思っていた。ところが、そうでない用例を見たのである。

助動詞「ぬ」を伴う動詞に可能の意が読みとれる用例を、既に、C群の用例⑽において、「心は花になさばなりなむ」として見てきている。それは、それとして、本章では、佐伯論考に引かれていた「住めば住みぬる」を見ていくことになる。「ぬべらなり」に連なる動詞にも可能の意が読みとれる用例を見ていくことになるが、それは、「ぬ」がそうさせるのか、「ぬべらなり」がそうさせるのか、である。

やや雑然とした章立てであるが、この一群をG群としておくこととする。

⑾月夜にはそれとも見えず梅の花香（か）を尋（たず）ねてぞ知るべかりける

（四〇）

詞書によると、花を折りながらの即興歌となるが、花に添えて贈ったとも見られている凡河内躬恒（おおしこうちのみつね）歌である。梅も白く月も白くて、どれが花とも見当がつかない。そこで、香りを手掛かりに探し求めて、〈（これが梅花だと）知ることができた〉と読みとれる。一般に、推量を担っていた「べかり（→べし）」が可能を担う単語となっていた、と見るが、推量表現を背景に可能表現が醸成されていたと見るほうがよいだろうか。

⒀夢とこそいふべかりけれ世の中にうつつあるものと思ひけるかな（八三四）

「あひ知れりける人の身まかりにければよめる」という詞書ある貫之歌である。主語は、〈この世〉であろうか、〈現実生活〉であろうか、いずれを想定しても、〈夢ということができた〉

と読みとれる。推量から適当が、適当を経て可能が、と見えてこようか。蓋然性の度合いの違いである。第三句からの三句には、詞書を〈あの人が亡くなるまでは〉に読み替えて補うことになろう。

(27)身は捨てつ心をだにもはふらさじつひにはいかがなると知るべく（一〇六四）

初句切れ・三句切れの興風歌で、出家することに決めたが、心は捨てないつもりだ、と述べる。下の句は、その理由で、〈（わが身が最後にはどうなるかを）知ることができるように〉と読みとれる。

(28)山科の音羽の滝の音にだに人の知るべきわが恋ひめかも（六六四）

一一〇九番歌と重複するが、下の句は「人の知るべくわが恋ひめやも」となっていて、語法のうえからは、「べく」が相当する構文である。また、「かも」は名詞に付くのが大方で、そこも、「やも」が適切である。「音」は〈噂〉の意で、〈（噂として）でも、人が）知ることができるほどに〉と読みとれる。

(29)白雲の絶えずたなびく峰にだに住めば住みぬる世にこそありけれ（九四五）

惟喬親王歌で、上の句は実際に隠遁した京都の大原の小野の風景であろうと見られている。「住まば住みぬる」の誤りではないかと一瞬思ったのは、B群の用例(6)・(7)・(8)・(9)・(10)において見てきた仮定条件句の帰結句の動詞に似通う文型だったからである。そして、その瞬時の誤解は、この表現生成の事情を読み解かせてくれた。既に定着していた文型の「未然形＋ば」に倣って「住まば住みぬる」と呟いた親王は、その段階での実生活を意識して「已然形＋ば」へと転換させていた。その表現が「住めば住みぬる」であった、と思いたくなったのである。〈仮に住んでみるなら〉ではなく、〈実際に住んでみると、住むことができた（人生であったなあ）〉と読みとれたのである。「世」は、多くが社会を指していうが、個人を対象にしていうこともあって、その場合の訳語は〈人生〉である。

(30)身を憂しと思ふに消えぬものなればかくても経ぬる世にこそありけれ（八〇六）

巻十五（恋歌五）に載っていて、その配列順からも、上の句は失恋を意味するものと解されている。そこで、「かくても」は〈このように失恋に悲しみながらでも〉となり、〈（失恋の悲しみに耐えてでも）生きていくことができる（この世であったなあ）〉と読みとれる。

用例(29)・(30)に、いわゆる完了の助動詞「ぬ」を伴った動詞に

可能の意が読みとれたのであるが、その「ぬ」の、殊に確述といわれる〈確かに…た〉などの意に可能の意を醸成させる語義があったのであろうか。E群の用例⑿で見てきた「誰かは春をうらみはてたる」において疑問符（？）を付けておいた「たる」についても、これら「ぬ」に通う何かがあったのであろうか。

⒅ちはやぶる神やきりけむつくからに千年（ちとせ）の坂も越えぬ。べらなり（三四八）

光孝天皇が親王のころ、おば君の八十の賀に銀の杖を贈ったのを見て、そのおば君に代わって僧正遍照が詠んだ歌である。上二句の主語は〈この杖は〉で、神が作ったのだろうか、と、そこで切れる。続いて、杖をつくと同時に、〈（千年の坂を）越えていくことができそうだ〉と読みとれる。そこに読みとれた可能の意は、「ぬ」がそうさせるのであろうか、「ぬべらなり」がそうさせるのであろうか。

×　×　×

標題に掲げた表現に該当する用例は、以上である。A群五用例／B群五用例／C群五用例／D群二用例／E群五用例／F群二用例／G群七用例の、計三十一用例である。小稿は報告を目的としているので、ほぼ目的は達成したものと思っている。

八　小稿から自身に課せられた課題など
―可能の意が読みとれてしまうのか／可能の意が託されているのか―

小稿は、表題に掲げた表現を七類型に分類して報告したが、その類型も便宜的なものでしかなく、また、その現象についての理解も十分ではない。殊に、それら表現について、当代人がどう意識していたかについては、まったく捉えていない。したがって、各類型の紹介や各用例の解説においても、一貫した姿勢のないままの叙述であった。いまあえて、その不安定な姿勢を告白するならば、それは、終章としての〝小稿から自身に課せられた課題〟の副題に示した疑問文二文のとおりである。

ある意味では、それは、古典文の読解や広く翻訳文の訳出などにおいてもいえることであろうが、読者にそう読めてしまうということなのか、筆者がそう読んでもらおうと託していたことなのか、ということが問題なのである。今回の三十一用例についていうと、現代人の多くは、そこに可能の意を読みとって現代語訳すると、理解が深まったと思えるであろうが、平安時代の当代人が、そこを可能の意に読みとってもらおうと思って、

しかし、表現として可能の意を表す単語や語句を用いることなく表現していたのであろうか、そういうことはわからないではないか、という問題である。

小稿の契機は、随所に述べてきているように、佐伯梅友論考である。ただ、その結果的表現という名称では、やはり、そのいおうとするところが見えてこないこと、その論考にいっているとおりである。「さらぬ別れ」の「さらぬ」など、打消表現のなかの自由意志ではない不可能から抽出される可能については捉ええても、肯定表現のなかに現れてくる可能については、手掛かりが容易には見つからないのである。

小松光三は、蓋然性の度合いによって、蓋然性ではなく可能性になるのだといって、「べし」と「む」とを区別していた。その蓋然性は、多様な事態が起こりうる確実性の度合いをいっていて、その度合いの違いによって、蓋然性が可能性にもなる、といっているのであろうか。いうならば、確率の違いで、同じ単語が推量にも可能にもなる、ということなのであろうか。

今回、筆者は、その可能の意の読みとれる表現について、一部においては助動詞を手掛かりにしながら、一方においては、表現形式というか文型というか、そういう構文的な面にも観察の視座を配して整理しようと努めてみた。ただ、どのように整理しようと、そのような表現から、現代人は、可能の意を読みとることができるというのか、それとも、当代人がそういう語彙と構文の力を借りて、可能の意を表現していたのかは、見えてこない。

現在のところ、そういう語彙と構文の表現からは、可能の意が発生したもののように感じとっている。それは、可能の意を当代人は、先行して成立した不可能表現を通して認識していたであろうと、漠然と感じとってしまっているからである。ある程度、古典文に接しているおかげで体得した認識である。その発生したについては、醸成された、と受けとめてもよいと思っている。

注

(1)『講座　解釈と文法」（記紀歌謡・万葉集・古今集・新古今集』（昭和35年／明治書院）登載の佐伯梅友「古今集の解釈と文法上の問題点」に取り上げられている「結果的表現」。

(2) 日本古典文学大系『古今和歌集』（昭和33年／佐伯梅友／岩波書店）の巻頭にある解説の六（文法）の9の「結果的表現」。

(3) 日本古典文学全集『古今和歌集』（昭和46年／小沢正夫校注・訳／小学館）で、語法については、時枝文法に拠るところがあって、注目していた。

（4）新編日本古典文学全集『古今和歌集』（一九九四年／小松英雄・松田成穂校注・訳／小学館）で、小稿の論題に該当する用例への施注や訳出が、前身の日本古典文学全集『古今和歌集』よりいっそう顕著となっている。

（5）何に拠っているか、なお、探しえていない。新日本古典文学大系『後撰和歌集』（一九九〇年／片桐洋一／岩波書店）の「心あてに見ばこそ分かめ白雪のいづれか花の散るに違（たが）へる」（四八七）の「心あてに見ばこそ分かめ」の「め」は、まさに、その「む」の已然形の用例だが、残念ながら、そこにその「可能を含んだ推量」という注記を見ることはなかった。もちろん、訳出には可能の意を読みとっていて、「見分けられるかも知れない」とあった。

（6）三矢重松『高等日本文法』（明治四十一年／明治書院）の第二編（詞辞）第七章（可能詞）五（生得被能動詞）においては、「（折らばや）折らむ」の「折る」は、可能的動詞といわなければならない、といっている。

（7）『日本語文法大辞典』（平成13年／山口明穂・秋本守英編／明治書院）の「可能」（小松光三担当執筆）の項。

（8）吉井健「「結果的表現」から見た上代・中古の可能」（二〇一八年五月／「井出至博士追悼万葉語文研究　特別集）／和泉書院）。

後記

「はじめに」の末尾に述べたとおり、小稿は、吉井論文の存在を知って、慌てて、該当する三十一用例の七分類を六章に収め、筆者の今後の課題を踏まえた報告である。吉川論文は、上代・中古の可能表現総括史である。したがって、小稿が取り立てた事項のなかには、吉川論文が指摘する事項と若干共通するところもあるが、小稿はあくまでも表現実態の整理でしかないところから、施注などは避けることとした。事情、ご理解いただきたい。なお、念のため、小稿の國學院雑誌への掲載採用の決定通知の日付が令和元年六月十四日であることを記しておくこととする。